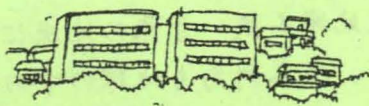


格差の広がる被災地



復興住宅で 独居女性死亡

4月 ポートアイランド
十四日午後十時二十分ごろ、神戸市中央区港島中町三の復興住宅で、一人暮らしの女性（60）が、心臓病で死亡した。隣に住む女性が気づいた。隣に住む女性が気づいた。隣に住む女性が気づいた。

「4月の神戸新聞記事より」

震災4年を過ぎても癒えない「心の傷」。
ますます孤独な被災者の現状です。
将来の高齢化社会の課題を現実に見せつけ
られているようです。

仮設が解消されても
「復興」したことになる
現状を知ってください。

現状を知ってください。



一人暮らしの 57歳男性自殺

4月 神戸・西区の仮設

十三日午後二時十分ごろ、神戸市西区室谷一の仮設室第三住宅で、一人暮らしの無職男性（57）が電気コードで首をつって死んでいるのを市職員が発見した。

神戸市西区によると、死後約十日。遺書などはないが、自殺とみて調べている。男性は神戸市灘区で被災し、一九九五年五月、同仮設に入居。来月には市営市の公営住宅に入居する予定だったが、手続きなどの連絡が神戸市にないため、職員が自宅を訪れた。

近所の住民によると、男性は一年ほど前、勤務先の会社が倒産、失業中だったという。親しい住民の一人は「二週間ほど前に会ったときは元気だった。入居先の近くの職業安定所に行くと言っていたのに」と話していた。

震災の授業実践

京都市立桃山東小学校6年2組
1999年3月卒業製作



「大震災」を、学習した京都の6年生が卒業製作で作った「マンガ」が送られてきたのでその一部を紹介いたします。
ユニークなキャラクターが登場し、自然に読み進んでいく工夫にびっくりです。

まなび
あなたは、阪神大震災の真実を知っていますか。知っている人も、知らない人も、私達といっしょに、この地震ワールドを体験してみてください。きっと、いろいろなことがわかるはずです。それでは、探検に出かけましょう。

ご意見・ご感想をお寄せください。

季刊発行（次回、震災4.5周年7月17日発行予定）

(P.8)

被災地だより これ以上人災による犠牲者を出さないために

強力な絆を避難所になった神戸の学校現場から全国へ

絆



第10号

1999・4・17

全教神戸市教職員組合「絆編集係」

神戸市中央区下山手通

4・13・9中尾ビル3F

TEL-078-391-7508

FAX-078-391-8549

〒振込口座番号 01170-7-29732

統一地方選挙…（神戸市会議員）

「空港問題の住民投票」の是非を争点に行われた結果

「神戸空港・住民投票の会」から
この度の統一地方選挙の結果を受けて
寄せられたコメントをお知らせします。

条例賛成前進

今こそ大きく署名運動を広げよう！

注目の神戸市会議員選挙で、市民の審判が下されました。
投票率は51.70%（前回48.23）で、空港建設を批判し条例制定を求める議員は24議席（凍結を含む）に前進し、逆に空港賛成の議員は47議席に後退しました。（改選前反対派19・賛成派51）
新しい市議会の構成が決まった段階での議会での新たな取組を進めなければなりません。はつきりしていることは、現在遂行中の対運輸省・環境庁署名を本格的に拡大していく必要が一層高まっています。
今回の市議選での前進をバネに各区、各団体に速やかに署名活動など取組の方針を具体化されるようお願いいたします。（次ページへ）

第2次署名集約は

5月15日の予定です。

※「神戸空港・住民投票の会」は、震災の教訓（復興の街づくりは「大事なことはみんなで決めよう」を合言葉に、神戸空港問題を、住民投票で決めることを実現させるために運動を進めています。



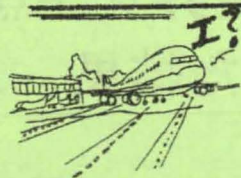
「住民投票の会」では、3月中旬各区の会・団体の代表者36名が上京し、1月から集めた署名34983筆を運輸省・環境庁に届けました。

2度目の運輸大臣との会見、環境庁とも2時間の折衝を行う中で、神戸の運動が、「議会の住民投票否決で、決して終わっていない」ことを行動で示すことになりました。

(その後、環境庁への運輸省からの意見照会が行われ、現在その調査に入る段階です。結果ができるまでにかかる時間を有効に使い、今後さらに署名運動を広げていく必要性を確認しています)

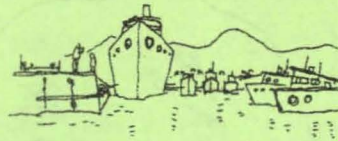


全教神戸でも、この会報「絆」その他で全国的に署名を呼びかけたところ、青森・京都・県下の姫路・尼崎・北播・西宮などから多数の署名が現在も寄せられています。それぞれの街の課題に結びつけ「住民投票」の問題意識の高まりを感じます。5月の第2次集約に向け引き続きご協力をお願いします。



神空港は ムダな投資?

〈経済再生への戦略会議でも〉



今回の市議員選挙の結果、市会の勢力分野が変わったにもかかわらず、現市長は、「空港問題は決着済み」とし、市民の声を聞く耳を持つようとしていません。下記の記事は全国的な経済不況の中で、これまでの大型開発プロジェクトでは乗り越えられない深刻な事態であることを示唆しています。その事に早く気がつくかどうかで将来に大きく影響する大切な転換期でもあります。

朝日 先日、「日本経済再生への戦略」と題した経済戦略会議(小渕首相の諮問機関)の最終答申が公表された。これだけデーマが大きくなると、報道もとかく議論に傾きがちな。しかし記者会見では、具体的なやり取りもあった▼たとえば、神戸市が建設を計画している「神戸空港」問題。答申には神戸のこの字も出てこないけれど、戦略会議は事実上「ノー」の立場なのである。東京のホテルで開かれた会見で、樋口広太郎議長(アサヒビル名誉会長)は「従来の型の公共事業を許すのか。神戸空港についてはどうか」という問いに、つぎのように語った▼「われわれは(神戸空港が)必要かどうか、新幹線の利用客数などいろいろと分析した」「一つひとつの問題については、たとえば神戸市議会なり神戸市長の問題だ。しかしわれわれは、公共事業の整備は(自治体単位でな

く)広域ブロックで調整してもらいたい、という立場だ」▼なぜ、広域ブロックで調整せよ、というのだろうか。それは「(自治体単位の空港では)自治体の赤字が膨らむうえ、費用対効果が悪いと懸念しているからだ」「答申では分散して書いてあるのでわかりにくいかもしれないが、そのことをい、これでもかこれでもか、と書いたつもり。新聞などでも強調してほしい。これは政治の問題であるとともに、世論の問題なのだ」▼そこまで言うのなら、なぜ答申に「神戸」という具体的な名前を出さなかったのか、と質問が飛んだ。樋口氏は答えた。「けんかを売ればいいかもしれない。だが、われわれの役割はそうじゃない。しかし、事態の緊迫度を見て、踏み込んで書いたつもりだ」▼公共事業の長期計画を見直して、各地がバラバラに進める無駄な投資を止めよ。それが戦略会議の提言の一つだ。その通りだと思ふ。「神戸空港」は、まさに無駄な投資に当たる。

25年前、直下型大地震が神戸に来ることを知っていながら、それに見合う街づくりをしなかった結果、大変な被害がでました。この震災の教訓が生かされないで、相変わらず「株式会社神戸」的発想で、「バラ色の夢ばかりを宣伝する空港」を進めようとし、その問題点を見ようとししない「神戸市政」「現市長の姿勢」に、確実に批判の声が広がっています。

「空港」の持つ問題を解決するために、住民の直接の意志ができるだけ反映できる風通しのよい市政になるよう、引き続き関心を持って運動を進める事が求められます。



《神戸の子どもたちは今》

新学期を、期待と不安の入り交じった気持ちでスタートした子どもたちですが、新1年生を迎えることで、どの子達も確実に1つ大きくなった顔を見せます。子ども同士の教育力の大きさに感心する時期でもあります。この顔・この姿が前向きに成長できるよう、その期待に応えられる環境づくりが私たち大人の仕事であると、新たな気持ちになってスタートしたところです。



神戸では昨年に引き続き、「震災復興教員」139名が、震災の復興を進めるために加配されました。

現場では、子どもたち一人一人の声に耳を傾け、それぞれの課題に納得して取り組める「ゆとり」が求められています。

しかし新年度スタートから追われるような毎日です。例年の予定された行事に加え、新たな課題「新教育課程」の研修が入り、ますますその忙しさに拍車がかかっています。

昨年3学級だったところが、1名転出したために2学級になり、改めて、昨年の「ゆとりの有り難さ」と、子どもの声が聞けない今の「忙しさ」を実感した先生の声をお聞かせ。

新1年生の保護者がつくづく校舎を見ているので話を聞くと、「懐かしいです。震災の時この廊下でしばらく過ごしました。おばあちゃん達は図書室でお世話になりました。入学した子どもが3つの時、ここで知り合ったお友達と一緒にクラスになったと喜んでいました。」震災のことを小さい子どもがしっかりと覚えている話を聞きました。震災後経済的な事情から被災地を離れていった子どももいます。

被災地はもちろん、被災地に限らず、教育的配慮の必要ないろんな子どもたちの心のケア、そして親の声を聞いたり、忙しい担任教師のサポート役として「復興担当教員」の活躍が今年度も望まれるところです。

「神戸のなおちゃんたち」小学校卒業

震災当時2年生だった子どもたちが、この3月小学校を巣立っていきました。当時の子どもたちの頑張った姿を、主人公なおちゃんとしてお話「神戸のなおちゃん」にまとめ、全国に発信したのが、今から3年前です。

その後それぞれの家庭の事情、住んでいる環境の違い、被災した心の傷をひきずりながらも小学校を卒業するまでに成長したお互いを確かめたくて、小学校を卒業した翌日の3月25日、早速第一回2年生同窓会を開きました。

当時2年1組の呼びかけで親子併せて90人程が集まりました。遠く広島から、埼玉からも来ました。

4年ぶりに会った「なおちゃんたち」でした。短い時間でしたが震災前後の思い出を語り合える仲間として「これからも集まりたい」思いを多くの子どもたちが寄せてくれたのが何よりでした。

「続・神戸のなおちゃん」をその主人公たちに手渡し、一層たのしくなった姿で中学校に見送ることができ、うれしいひとときが過ごせました。

参加できなかった友だちにもこの様子を必ず伝えたい気持ちを強くしたものです。(当時2年1組担任)



新しい校舎の前で、主人公の「なおちゃん」達。

急がれる、震災が風化しない取り組み!!

震災当時在校していた子どもたちが、今年度の6年生で最後になります。震災が風化し過去のものになってしまわないよう、その教訓を形にして残す取組がそれぞれの街、学校で急がれます。

(それぞれの学校での実践をお知らせください。お互いに交流しあいましょう。「震災」に関する資料など協力します。全教神戸書記局・「絆」編集係まで問い合わせください) … (p.8に、寄せられた実践の一部を掲載)

震災4周年を迎えて、神戸の復興の課題をお話にまとめた

「続・こうべのなおちゃん」

なおちゃんのメッセージが全国に発信されています。

自分たちの街の課題として受け止め、地元の教育活動に実践された様子が届きましたので紹介します。

業庁

屋

(朝日)

(99.3.11)

第3種郵便物認可

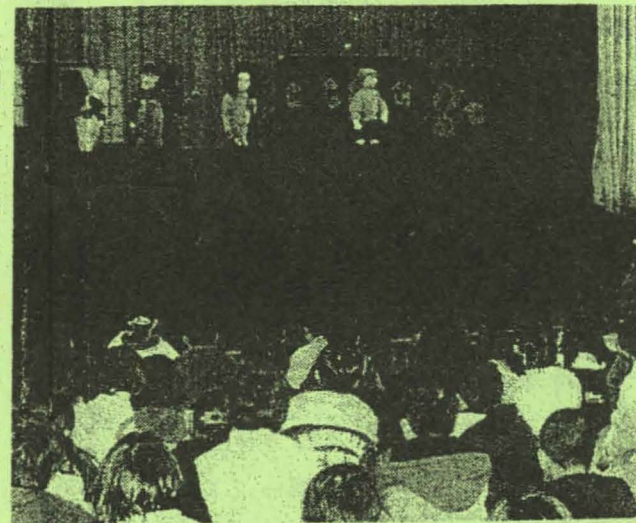
小林市の市立小林小

ふるさとを思う心を

「おはなしの会」と同小が企画

物語には、被災したなおちゃんが家族や地域の人、全国から集まってきたボラ

人形劇に見入る子供たち。小林市細野の小林小で



ンティアの人たちの助けや、励ましの手紙によって、頑張る姿が描かれてい

今年一月十七日には続編が出た。なおちゃんは六年

生。地震で崩れた校舎は再建されたが、避難した友人はまだ戻っていないかった

人形劇は続編も含めた構成となっており、なおちゃんと同じ六年生約百三十人が見た。池見さんからは

「人の温かさに気づき、自分たちの住んでいる町を大切に過ごして下さい」とのメッセージも寄せられた。

劇を見た池上千紗さんは「私は、なおちゃんのようにたくましく生きていけるのかな」、龍弥生さんは「ゴミ拾いなど自分にもできるボランティアをしたい」と話した。

おはなし会は、同小の保護者を中心となり、毎週一回の読み聞かせなどをしていく。人形劇は初めての試みで、一月の後半からすべての人形を手作りでそろえ、三日に一度のペースで練習を重ねてきた。

人形劇「神戸のなおちゃん」上演

阪神大震災で被災の少女描く

神戸市灘区の小学校教諭池見宏子さんが阪神大震災当時、担任をしていた小学校二年生の少女をモデルに書いた物語「神戸のなおちゃん」が、人形劇になって小林市の市立小林小で上演された。同小で絵本の読み聞かせをしている「おはなしの会」(山下町子代表)と同小の企画で、震災によって神戸の街を考えるようになったなおちゃんを通じて、ふるさとや地球に思いを致すようになってほしい、との願いが込められた。

この「なおちゃん人形」が、神戸に里帰り・・・

手づくりの大きななおちゃん人形が、神戸に送られてきました。忘れたい震災の体験も「なおちゃんの話」の中で素直に話せる子どもたちです。そのなおちゃんがお話の中だけではなく、大きな人形になって自分たちの目の前に現れたのですから驚きと喜びで大騒ぎ、たちまち人気者になりました。

(P.5)



地震防災と理科教育・学校

樋谷中学校・青本 格

—1995年兵庫県南部地震が学校と教育に突き付けた課題—

(地質学論集 第51号より)

シリーズ6

地域を対象にした 研究と教材化



「地域に根ざす」ということは、教師自身が地域の自然を研究の対象として、子どもたちや仲間と共に調べていく過程も含んでいる。

地域学習は、すでに調査された立派な研究成果があつて、それを焼き直して教えるというものではない。子どもたちの学習にとって、「自ら自然に働きかける」事が重要であるのと同じように、教師にとっても「自ら調べる」事は決定的に重要な意義を持ち、教える内容に豊かさと重みをもたらすことだろう。

地域に根ざす大地の学習が全国の多くの学校で行われるためには、専門の研究者と大学・博物館などの研究機関の役割は決定的である。かりに、文部省が指導要領を改めたり、教育委員会が「地域学習の重視」と指示を出したとしても、地域に根ざす大地の学習は簡単にできることではない。

そのためには、日々、子どもと接している小学校、中学校、高校の教師と専門の研究者が共同の課題として、地域の地形・地質の学術的研究と、その教材化のための研究・実践を行っていくことが強く求められている。

その時、研究者は地域素材をグローバルな視点で全体の中に位置付け、その特殊性が普遍性のどのような現れであるかを読み取りながら新しい情報を提供する役割を担っている。教師は子どもの発達段階や自然認識過程にそくしてし、無理なく・おもしろく・わかる学習内容、学習過程の構成を考えたい。



研究者や研究機関は、自分の研究テーマの他に、自分の勤務地・居住地の地形・地質をも一つの研究対象とする、という態度が必要なのではないだろうか。「地元のことを知りつくした地元の研究者」の存在が求められている。日本の各地で、そんな研究者が教師と結びついて、それぞれの地域の特殊性と地域の課題をふまえた、自分たちの「手づくり」「草の根」教科書が作られていくことを追求したいものである。



次回は、「学校被害と防災対策」について掲載します。

そこでは地域を狭い意味の地域に閉じ込めず、日本列島も地球の中の地域であり、地球も宇宙の中の地域であるという視点からの幅広い学習の中に位置付けることを忘れないようにしたい。

それは初等・中等教育の場でだけ行われることなく、博物館などの普及活動も含めた広い意味での市民的学習運動の一つとして位置付けられて、市民の「自分の住む大地のことを知る権利」「自分たちのまわりの自然を知って、自然と命を守る権利」を保障することにつながっていくものではないだろうか。

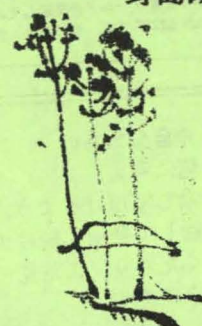


淡路に震災復興へのシンボル
“北淡町震災記念公園”
4月にオープン!

今回の地震で地表に現れた野島断層を学術資料として保存する「断層保存館」と淡路の新鮮なさかなや野菜を中心にオリジナルメニューでお迎えするレストラン・物産館が4月にオープンします。

さらに平成12年には防災教育などを体験できる地震科学館が開館します。

野島断層上の住宅を保存・公開へ



保存館では震災体験を風化させないために、いつかこるかわからない自然災害への防災意識を喚起する意味でも、施設の充実をはかり奮闘をならし続けてほしいです。



「震災体験」の風化へ警鐘を鳴らす。阪神・淡路大震災を体験した者にとってはだれもが思い出したくない、できるものなら忘れてしまいたい、つらい体験です。しかし、この体験をこのまま風化させていいのだろうかという気がします。四年たった今でも多くの被災者が病氣や経済的負担で苦しんでいるなかで支援策等が次々と打ち切られています。また、危機管理がなされ大災害が起こった時の防災や救助のシステムが整ったとは到底思えません。このままでは無念な思いで亡くなった人が浮かばれません。